

## 音楽科

# 異学年の交流学習を取り入れた箏の授業に関する考察

## —第4学年における実践を通して—

長澤 希

### 1 研究の背景と目的

本学校園の大きな特色の1つに、幼・小・中一貫教育がある。本学校園の音楽科では、昨年度までに幼・小・中12年間にわたる目標をできるだけ分かりやすく見渡せ、そこから様々な授業を展開したり、達成度を評価したりすることができるような新しいカリキュラムの開発を試み、実践検証を行ってきた<sup>1)</sup>。このような一貫教育に関する研究は、全国各地で盛んになって久しい。しかし、実際の教育現場において、教科の中で協同的に学んだり交流学習をしたりすることが容易ではない現状もある。このような中で、本学校園では、一貫教育の強みを生かし、各教科や領域で交流学習の実際に取り組んでいる。

そこで、本研究では、異学年交流を取り入れた音楽科の授業実践を通して、音楽科授業での交流学習の有効性や課題を検討することを目的とする。尚、本稿では第4学年と第8学年の交流学習における、第4学年の子どもの変容に特化して論じることとする。

### 2 箏を扱う意義

本実践では、和楽器の箏を用いて、第4学年のペア学年である第8学年と交流学習を行う。平成20年度の小学校・中学校学習指導要領において、音楽科での、日本の伝統音楽や和楽器に関する記述はより詳細なものとなり、その取り扱いの重要性が謳われるようになった。日本の伝統音楽や和楽器に関する研究や実践が現在多く存在する中、全国の公立小・中学校において取り扱われている

和楽器で、最も多く使用されているのが箏である<sup>2)</sup>。箏が多用される理由として、①「箏」の音色が多くの子どもたちに受け入れられること、②演奏が比較的容易であること、③子どもたちに指導できる人材が身近に多いこと等が挙げられる<sup>3)</sup>。本実践において箏を扱った理由も、これらの理由に等しいが、それに加えて、本学校園が所有している箏が多数あり、一人ひとりの十分な経験が可能であったためである。

現行の小学校学習指導要領における第4学年の箏に関連した記述は、「B鑑賞」「A和楽器の音楽を含めた我が国の音楽、郷土の音楽、諸外国に伝わる民謡など生活とのかかわりを感じ取りやすい音楽、劇の音楽、人々に長く親しまれている音楽など、いろいろな種類の楽曲」を取り扱うこと、という表記にとどまっており、具体的には箏曲や和太鼓の音楽などを教材として選択して指導することが書かれている。本校で使用している教科書の教育芸術社「小学生の音楽4」の中には、歌唱教材及び共通教材として「さくらさくら」が取り扱われているのみであり、箏曲に関しては鑑賞の活動の中で使用する位置付けである。

しかしながら、本実践では箏曲を表現及び創作の活動で取り扱うこととした。それは、第8学年が箏の学習経験があるため、第4学年にとって第8学年の生徒が身近な指導者となることができ、そのことは交流学習の中で有意に働くと判断したためである。尚、第4学年で箏を扱うねらいは、箏のひびきを味わうこととし、箏の演奏技能の向上が主要なねらいとはならないよう設定した。

### 3 授業の構成

### (1) 題材名

「箏のひびき～いっしょに弾こう～」

教材：日本古謡「さくらさくら」

### (2) 対象児

広島大学附属三原小学校第4学年75名を対象とした。尚、交流学习の相手は、広島大学附属三原中学校第8学年78名である。交流学习は、学級単位で行い、各学年の1組同士・2組同士がペアとなった。

### (3) 第4学年の児童について

箏を習い事で経験している児童が1名、箏に触れたことのある児童が1名いる。その2名を除いたすべての児童が、本題材で初めて箏に触れる。

また、質問紙調査（H26年5月実施、75名、複数回答）によると、「日本の音楽に興味があるか。」の問いに対して、興味がある54名・興味がない5名・どちらでもない16名と回答している。日本の音楽を知識として学習する機会があっても、体験的に触れたり理解を深めたりした機会は少ない。

### (4) 題材について

本題材で扱う教材曲「さくらさくら」は、子ども向けの箏の練習曲として江戸幕末に作られ、明治以降歌詞がつけられて歌われるようになった曲である。日本の自然の歴史や美意識などを表現する代表的な曲として国際的に演奏される機会が多く、箏の音楽や日本の文化についてその良さを感じさせることができるものである。本題材では、ゲストティーチャーを迎えて箏との出会いの場を設定する。プロの演奏を間近で聴いたり実際に教えていただいたりすることを通して、箏のひびきの美しさや演奏する楽しさをより一層感じることができ、箏への興味が広がると考える。さらに、箏独自の奏法を生かした創作の楽しさを学ぶとともに、異学年とともに学習したり演奏したりすることを通して、互いの音色が響き合う良さを感ずることのできる題材である。

### (5) 指導にあたって

4年生と8年生の合同で「さくらさくら」を演奏し、箏の奏法を生かして表現することで箏のひびきを味わうことを学習のゴールに設定した。4年生は自分たちの考えた旋律が8年生とともに創る演奏の中に生かされるよう、交互に演奏を繋いでいく形態をとる。合同班の中で、4年生と8年生がペアになり、4年生が主旋律、8年生が副旋律を担当し、二重奏を行う。また、「さくらさくら」の前奏と間奏に創作部分を設け、自分たちのイメージをもとに創作した旋律で表現できるようにした。

### (6) 題材の目標

お互いの表現を感じて聴き合いながら演奏を繋いでいくことを通して、箏のひびきの良さを感ずることができる。

### (7) 学習計画（全8時間）

|     |               |     |
|-----|---------------|-----|
| 第1次 | 箏に出会おう        | 2時間 |
| 第2次 | 箏の旋律を創ろう      | 3時間 |
| 第3次 | 箏のひびきを一緒に味わおう | 3時間 |

※交流学习は、第3次の3時間で行った。

## 4 授業の実際

### (1) 箏との出会い

第1次では、ゲストティーチャーとして箏の指導者を2名招き、模範演奏を聴いた。また、箏を演奏する際の姿勢、弾き方、弾き終わり、礼儀等の細かな所作について教わり、“トレモロ”や“流し爪”といった箏独特の奏法を見たり弾いたりして学んだ。プロの演奏する箏の音色や、奏法を間近で感じたことで、自分たちもやってみたくという演奏への意欲が高まっていた。また、箏の先生に教えていただけるという特別感が、子どもたちの集中力をより一層高めていた。

1人1面の箏があることで、短時間の授業の中でも一人ひとりが十分な体験ができ、箏に向き合うことができた。



図1 ゲストティーチャー来校

(2) 箏を使った旋律創作

第2次では、前奏と間奏の創作を行った。第1次を終えた時点で、個人による演奏速度の違いがあったり、曲の途中につまずく子どももいたりしたが、「さくらさくら」の主旋律を1曲通して弾くことは全員が経験できていた。主旋律の感じを、演奏を通して掴んだ上で、前奏と間奏の旋律ではどんな様子を表したいのかという共通のイメージをペアで明確にさせてから創作にとりかかった。

ペアで考えたイメージには、下記のようなものがある。

- 前奏は、ゆっくりとさくらがひらきはじめるのを人々がさくらの下でわくわく待っている様子を表したい。間奏では、さくらが散り始めてゆっくりとお花見のおわりを知らせるしずかな場面のイメージでつくりたい。
- さわやかな風や風景が浮かぶようなやさしい音楽をつくりたい。自然と話をするような様子で、にぎやかではなく、ことりのさえずりや花びらが落ちるときの音が聞こえてくるぐらいしずか。さくらがまんかいをこえて最後の花びらが落ちるときに何かを伝えるような様子と、自分の心が表れるときの色のような感じを伝えたい。(子どもの記述より)

このようなイメージを各自がもって、創作を行った。

また、創作段階での子どもたちの共通の捉えとして、前奏は「終わるふし」、間奏は「つづくふし」という認識ができていた。そこで、箏の音階で創作するにあたって、前奏は小節の終わりの音を五弦(E<sub>4</sub>)か十弦(E<sub>5</sub>)にすること、間奏は小節の終わりの音を、五弦(E<sub>4</sub>)と十弦(E<sub>5</sub>)以外の音で終わること、という共通の約束をみんな

なでつくった。

イメージをもたせたことと、ふしの「終わるかんじ」と「つづくかんじ」を意識して共通の約束で創作を行ったことが、子どもたちの創作の視点を明確にし、旋律を創る際の手がかりとなっていた。このことが分かる子どもの記述は、下記の通りである。

- さくらがだんだん元気になるイメージなので、だんだん低い音になるように工夫しました。
- 風がふいて、空へまいあがる感じのイメージなので、高い音からはじまる「十九八七六八七」にしました。
- さくらが悲しく散るのではなく、はげしく明るく散るように高い音からはじめて、最後は花がないと悲しむというのを表すために低い音にしました。
- 題名の「さくらさくら」に合わせて、さくらの木の周りの景色、風がふいているところ、さくらのようす、さくらが散るまでの4つの場面を感じられるように、「二三四六」と元気なようすと、「五五四」でさくらの散るまでの一部を表しました。

尚、実際に創作で使用した「さくらさくら」の譜面は図2の通りである。前奏は、「七六七〇」につづく1小節、間奏は、「七七八〇七七八〇」につづく2小節を創作部分として設定した。

『さくらさくら(二重奏)』 日本古箏/能登島子(1) 五線譜

| A72 4年生 |    | 1 4年生 |    | 1  |    | A71 4年生 |    | 1 4年生 |    | 1  |    |
|---------|----|-------|----|----|----|---------|----|-------|----|----|----|
| 第2      | 第1 | 第2    | 第1 | 第2 | 第1 | 第2      | 第1 | 第2    | 第1 | 第2 | 第1 |
| 五       | 五  |       |    | 七  | 七  | 五       | 五  | 七     | 七  | 七  | 七  |
| 九       | 九  |       |    | 七  | 七  | 四       | 四  | 五     | 八  | 七  | 七  |
| 七       | 八  |       |    | 八  | 五  | 五       | 七  | 九     | 五  | 八  | 七  |
| 八       | 七  |       |    | 五  | 四  | 九       | 九  | 五     | 八  | 四  | 四  |
| 五       | 五  |       |    | 七  | 七  | 五       | 五  | 七     | 七  | 七  |    |
|         |    |       |    | 七  | 七  | 五       | 五  | 五     | 八  | 七  | 七  |
| 一       | 五  |       |    | 八  | 三  | 三       | 三  | 九     | 九  | 五  | 八  |
|         |    |       |    | 五  | 五  | 五       | 五  | 七     | 七  | 七  | 七  |

間奏 前奏

図2 箏の創作「さくらさくら」の譜面

(3) 8年生との交流学习(合同授業)

これまでに、4年生は8年生とペア学年として運動会で踊りを一緒に練習し、発表した関わりはあるが、教科の中での関わりは新しい経験となる。

交流学习では、中学校の指導者1名と小学校の指導者1名で指導を行った。

第3次では、4年生と8年生がそれぞれに考えた旋律をもちより、実際に二重奏を行った。第2次で4年生が考えた創作イメージを、ペアの8年生に事前に伝えていたため、8年生は4年生のイメージを大切にしながら、共通のイメージをもって副旋律の創作を考えてきていた。また、演奏だけではなく、演奏の前後には話し合いの場を設けて共通理解を図る時間をとった。

班編成は、4年生2名、8年生2名の計4名が1つとなり、その中で異学年のペアを2つ作る。片方のペアが「さくらさくら」の前奏を含めた前半部分を演奏し、もう片方のペアが、間奏を含めた後半部分を演奏する。その2つのペアの演奏をつなげて1つの作品となる。尚、人数の関係で、4年生1名、8年生1名の2名班になったペアもあるが、その班は曲の前半も後半も1人が担当するようにし、二重奏を行った。

交流学习の始めには、班内で自己紹介をして簡単な交流を図り、その後演奏を合わせる活動に入った。初めての合わせでは、出だしの呼吸を合わせることが難しく、演奏速度が安定しない班が多くあった。そこで、曲の出だしは身体を1度前に屈めて出だしの合図を大きく行うこと、前半部分のペアが後半部分のペアの演奏を見てアドバイスをするこの2点を教師が指示した。また、速度が安定するように手拍子で拍をとったり、演奏していないペアが演奏しているペアのそばに付き、隣で旋律を歌ったりすることで、演奏しない間も班員全員が活動できるようにした。

8年生との交流学习後に書いたワークシートには、主に心理的な関わりと音楽的な関わりの2つの点における記述がみられた。それらを次に示す。

【A児】合わせるときに、8年生さんがにっこりしたので、たぶん「がんばれ。」と言いたかったのだと思います。ちょっとだけまちがえたけど、合わせているときに見せてくれた笑顔を大切にしてひびくようにちゃんとひけたのでよかったです。  
(心理的な関わりに関する記述)

【B児】8年生さんに合わせることで、できるだけ楽しむ見ずにおぼえて、つまらないようにしました。8年生さんは、指がとてもしなやかで、トレモロなども上手だし、すぐに指が次の弦の場所に動いていました。そういう8年生さんのいいところはどんどんまねしていきたいです。  
(音楽的な関わりに関する記述)

A児は、箏を通して関わる中で8年生の心情を推測し、笑顔を大切にしようというコミュニケーションの重要性を示唆している。また、B児は、8年生がそばで弾く様子を細やかに観察しており、良さを自分の演奏に取り入れようとしている。このような記述内容を、類似した内容ごとに表1に分類した。

表1 交流に関する記述内容の分類

| 分類             | 記述内容                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
|----------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ①心理的な関わりに関する記述 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・丁寧に教えてくれた。</li> <li>・協力してできた。</li> <li>・仲が深まった。</li> <li>・教えてもらってうれしい。</li> <li>・難しい技をたくさんできていたので私も8年生みたいになりたい。</li> <li>・私が創ったせんりつに合わせて8年生がせんりつをつくってくれたことがうれしい。</li> <li>・心がひとつになるということがあらためて分かった。</li> <li>・一緒にいて楽しかったのでまた合同でやりたい。</li> </ul> |
| ②音楽的な関わりに関する記述 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・指の使い方を学んだ。</li> <li>・リズムを合わせるのが難しかった。</li> <li>・合わせたときに、ひびきがよくて、そのよさをしることができた。</li> <li>・箏の楽しさが分かった。</li> <li>・1人では奏でられない音楽になった。</li> <li>・一緒に演奏すると、ひびきをよく感じた。</li> <li>・日本の音楽にもっと興味をもった。</li> <li>・楽器で音を合わせることはむずかしいことではないのだなと思った。</li> </ul>  |

4年生 75名の8年生との交流に関する記述内容で、①主に心理的な関わりに関する記述(以下、①の記述)をした子どもは24名、②主に音楽的な関わりに関する記述(以下、②の記述)をした子どもは、51名いた。それぞれの回答内容別の内訳は図3、図4の通りである。

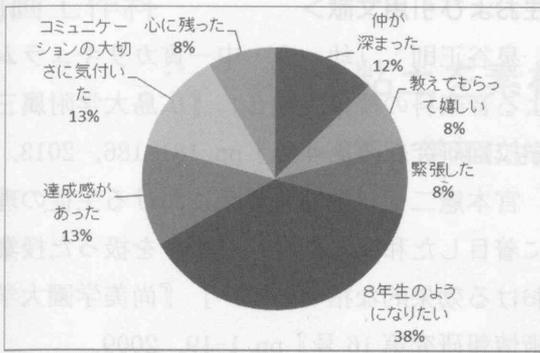


図3 心理的な関わりに関する内容

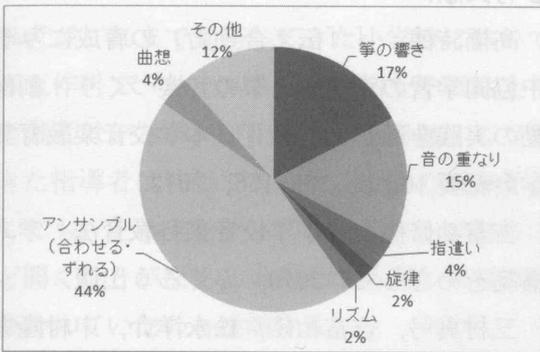


図4 音楽的な関わりに関する内容

感じたことであった。

題材の最後に、発表会を行った。本題材においては、箏の基本的な奏法が分かり、簡単な旋律が弾けること以上の高度な技能の習得は主要なねらいとしていなかったが、発表会での、子どもたちの箏の演奏は、教師の予想をはるかに超えた技能の上達が見られた。

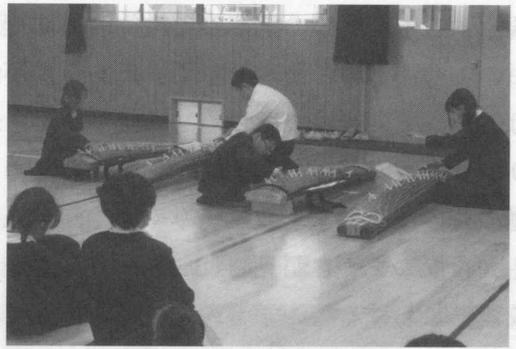


図5 箏の演奏発表

## 5 考察

①の記述をした子どものうち1名は、「なかなかしゃべれなかった。もっとしゃべれば、もっとできるようになると思った。」と課題的記述をしていたが、他の23名の子どもは、「仲が深まった。」「やりがいがあった。」等の肯定的記述があった。図3の内容をみると、「8年生のようになりたい。」が最も多く、これらの具体のすべては箏の技能面でのあこがれであった。

一方で、②の記述をした51名の子どもの半数近くが「アンサンブル」に関する内容を記述していた。「合わせる事が難しかった。」というアンサンブルの難しさと、「息を合わせて演奏することが楽しかった。」というアンサンブルの楽しさとの両面の記述があった。その他の回答には、「8年生にくらべて自分の箏のひびきが足りなかった。」等、自己の能力の課題について挙げているものがあった。②の記述で肯定的記述をした子どもに共通して見られた内容は、「8年生と一緒に演奏することでひびきがよくなった。」「2人でやると合わせた時のひびきが1人どちがって楽しかった。」等の、1人で演奏したときと比較して

本研究の目的は、異学年交流を取り入れた箏の授業実践を通して、音楽科授業での交流学习の有効性や課題を検討することであった。

交流学习がもっとも有効だったことの1つは、アンサンブルへの高い意識が生まれたことである。第4章における子どもの記述からも分かるように、4年生の多くの子どもが、8年生の音と自分の音の重なりに注目していた。そのことは、お互いの表現に耳を傾け感じていたからこそできたことである。実際に、1人のときよりも2人で合わせたときの方が、箏の音色が変わったと子どもたち自身が実感できたのは、8年生の弾く箏の響きの良さを感じたからであり、交流によってそれが可能となったためである。一方、課題は、箏を使った交流学习を行うに当たって、多くの箏を使用する場合に、活動場所が限られることや、校種間で授業時間が異なることも考慮し、題材を構成しなければならないことである。カリキュラム上ではなく、授業レベルでの交流や連携を今後考えていくに当たって、必要な課題を整理し見直していく必要がある。

## 6 おわりに

本研究を通して、交流学习の有効性と課題のほかに、箏の学習の可能性があることができた。本実践を通して、箏という楽器が、第4学年の発達段階においても、鑑賞の活動のみならず、表現及び創作の活動においても指導可能な楽器であることが分かった。子どもたちの演奏に取り組む様子を観察する中で、箏の演奏が比較的容易にできた理由の1つに、箏の読譜の容易さがある。箏の譜面は五線譜上の音符ではなく、漢数字で示されており、その数字が箏の弦と対応しているために、読譜の苦手な子どもも取り組みやすく、導入段階でも大きなつまづきが見られなかった。今後も小学校段階における箏の学習の可能性を広げていきたい。

また、創作については、「イメージをもって創る」ことの重要性を再認識することができた。子どもたちが創作の際に、自分の弾きやすい指運びで安易に創っているのではなく、実際に箏を弾きながら試行錯誤する様子が多く見られた。それは、自分たちのもつイメージが軸となり、創作活動の際の指針となっていたからである。また、イメージを仲間と共有することによって、互いに共通意識をもって創作することができていた。

さらに、創作の際に「終わるふし」と「つづくふし」の感じに子どもの意識が向いた理由として、これまでの題材との関連が考えられる。本題材にいたるまでに、子どもたちは「ふしづくり」の学習を行ってきた。教材曲「とんび」の学習をした際に、旋律の「終わるかんじ」と「つづくかんじ」があることに気づき、「ドで終わると終わった感じがする。」などの意見が出ていた。そのことを踏まえて、リコーダーではふしのつながりを意識して「ふしづくり」を行ってきた経験があった。その経験が、今回の箏の創作にも生かされていたと言えるだろう。このような、子どもの学びのつながりを導いていけるよう、系統的・段階的な音楽科の授業づくりを、今後もしていきたい。

## <注および引用文献>

- 1) 泉谷正則：「幼・小・中一貫カリキュラムによる音楽科の授業実践2」『広島大学附属三原学校園研究紀要第4集』pp.181-186, 2013.
- 2) 宮本憲二：「中等科音楽における生徒の理解に着目した和楽器指導—「箏」を扱った授業における効果的な指導とは—」『尚美学園大学芸術情報研究第16号』pp.1-19, 2009.

3) 前掲書2), p4

## <参考文献>

- 高橋詩穂：「「伝え合う力」の育成にみる小中協同学習の可能性—箏の音楽づくり・創作活動の実践を通して—」『日本学校音楽教育実践学会紀要16』pp.155-156, 2012.
- 吉富功修他：「小学校音楽科教育法 学力の構築をめざして」2010, ふくろう出版.
- 三村真弓, 吉富功修, 松永洋介, 中村隆夫, 山崎俊宏：「岐阜県におけるふしづくりの音楽教育成立の軌跡」『音楽教育学』第42巻第2号, pp.72-76, 2012.
- 松永洋介：「「ふしづくり」と「音楽づくり」をつなぐ創造性の系譜について」『学校音楽教育研究』12, pp.119-120, 2008.
- 岐阜県古城郡古川町古川小学校「ふしづくり一本道—基礎能力を培うために—」p.11, 1972.
- 島崎篤子：「1960年代の学校教育における創作学習～わらべうたとふしづくり教育に着目して～」『文教大学教育学部研究科紀要第46集』p.127, 2012.
- 三村真弓：「岐阜県古川小学校におけるふしづくり教育の理念と指導法の特徴—山崎俊宏の著書及び研究報告の検討をとおして—」『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部第62号』p.354, 2013.
- 文部科学省：「小学校学習指導要領解説音楽編」, 2008, 教育芸術社.
- 小原光一他：「小学生の音楽4」, 2011, 教育芸術社.